

て、ロードマップを提示した。

平成23年度版の「講義科目1-1 獣医学概論モデル・コア・カリキュラム」によれば、「全体目標：獣医学概論は、獣医学の役割と全体像を明確に把握することが目標である。概論では獣医学、獣医療、獣医師に求められる獣医哲学を学ぶ。獣医学では人類と動物の関係における獣医事の歴史的考察と、日本の獣医教育史を学ぶ。（以下略）」とある。また、「(1) 獣医学概論の理念 (略)」に次いで、「(2) 獣医史学 一般目標：海外および日本における獣医事の歴史的概要を習得する。到達目標：1) 古代における動物と人類の関係、動物の家畜化と獣医療の発祥、軍馬の起源について説明できる。2) 近代獣医学の発達過程を説明できる。3) 日本の獣医療について発達過程と特色を説明できる。」とある。以上のように、「基礎獣医学分野」の「獣医学概論」に「獣医史学」が必修科目として含まれており、教育目標が明確に記述されている。

#### 4. 獣医史学教育と日本獣医史学会の展望

新コア・カリキュラムの制定により、基礎獣医学分野の獣医学概論に獣医史学が取り入れられ、平成25(2013)年度の入学生から獣医史学が必修になり、獣医学教育における獣医史学の位置づけが明確になったのである。このことから、獣医史学研究の進展と共に、日本獣医史学会の今後の活動が期待される状況にある。(日本獣医史学会 顧問兼名誉会員)

#### 参考文献：

- ・小佐々学：「第2章 獣医史学」，池本卯典ほか監修『獣医学概論』，緑書房（2013）
- ・深谷謙二：「日本獣医史学会—その設立と30年の歩み—」，『日本獣医学雑誌』第41号（2004）
- ・日本獣医学人名事典編纂委員会：『日本獣医学人名事典』，日本獣医史学会（2007）
- ・日本陸軍獣医部史編集委員会：『日本陸軍獣医部史』，紫陽会（2000）
- ・日本獣医史学会ホームページ [http://jsvh.umin.jp]（令和4年12月6史学会合同例会）

## レプラと奇跡 脱神話化と脱医学化に向けて

### 堀 忠

ツァラアトは、旧約（ヘブライ語）聖書に少なからず見られる、翻訳困難な単語のひとつである。ツァラアトはヘレニズム期に成立した旧約聖書のギリシア語訳（七十人訳）でレプラ（λεπρα）と訳され、新約（ギリシャ語）聖書にもそのままレプラとして登場する。それがさらに後年、レプラ（lepra）としてラテン語の語彙に定着し、いつしか古代ギリシア医学のエレファンティアシス、近代医学のハンセン氏病に比定されるようになった。しかし聖書時代のツァラアト・レプラと、近代医学のレプラ（ハンセン氏病）との連続性・同一性については従来さまざまな異論があり、とりわけ中世以降のヨーロッパ社会で治療不可能な忌むべき病、いわゆる「業病」として注目され忌避されるにいたるまでの言説史には不明な点が多い。

著者は近年整備の進んだギリシア語文献のデータベース（Thesaurus Linguae Graecae<sup>®</sup>, University of California, Irvine.）に依拠しつつ、この語をめぐる言説史の一端の再構成を試みた。

翻訳は翻訳者に備えられた語彙の範囲で行われるものであり、また解釈のない翻訳はありえない。七十人訳レビ記の翻訳者は、レビ記13:2-3の基本的な問題設定「いかなるネガーがツァラアトのネガーであるか」を「いかなるハフェー（ἀφή）がレプラのハフェーであるか」と翻訳した。古代ギリシア医学において、ハフェーは通常触覚一般を意味して用いられる語であり、重大な身体病変に用いられる語ではない。皮膚を冒す重大な病変に用いられる語としてはヘルコス（ἔλκος）があり、七十人訳聖書ではこの語がヘブライ語シヒーン（ヨブ記のヨブ、列王記のヒゼキア王、出エジブ

ト記のエジプト人らが苦しんだことで知られる)の訳語にあてられている。一方レプラのこの時期(前3世紀)までの用例は数的にも限られるが、1)比較的軽微と考えられる皮膚の変化(主に医学文献にみられる)、2)エジプト・ペルシャなどにみられた追放などに帰結する重大な祭祀的禁忌の侵犯(主に歴史書、旅行記などにみられる)、3)意味の不鮮明な(既訳によればぎざぎざの、ざらざらした、など)形容詞、の三つに大別される。新・旧約聖書でレプラであったとされる人物は都合21人に及ぶが、その中に生命予後に、あるいは身体機能に重大な結果がもたらされたとされる例はない。また七十人訳全般においてハフェー(およびその動詞形ハプター、ハプトマイ)はもっぱら祭祀的な文脈で用いられている。翻訳者は「ツァラアトのネガー」を祭祀的な概念と理解して「レプラのハフェー」と翻訳したのであって、ツァラアト=レプラをエレファンティアシス=ハンセン病に擬する後年の理解は、その解釈を正しく継承したものとは思われない。ふたたび特定の病気が聖書の記述に結び付けられてスティグマ化されることを避けるためにも、ツァラアトを祭祀的な概念とした古代の翻訳者の解釈を尊重・継承することが求められるであろう。

レプラはまた、イエスのもたらした奇跡的治癒の物語との関連で注目されることが多く、レプラを語ることはそのままイエスを語ることにつながる。紀元後7世紀までのキリスト教文献におけるレプラの用例は856回を数えるが、年代的には4世紀、5世紀の用例が突出している。この時期はキリスト教の基本的な教理をめぐる論争の最盛期であった。イエスその人が神なのか、人とイエスの間の距離はどれほどのものであり、人にはイエ

スを模範とし、模倣しようとするのが可能なのか、許されているのか。「二性一身」(イエスは神であって同時に人であるとする、キリスト教の基本的教理)において、アレキサンドリアのキュリロス(神としての側面を強調し、人との距離を遠く、模倣の試みの及ばない位置に置こうとした。その文脈でレプラを語れば、イエスの癒したレプラは医師を含むいかなる人間にも及ばない重病であることが相応しい。アンティオケアのクリュストモスは、イエスを模範とし、模倣しようとすることの重要性を強調した。その文脈でレプラを語る立場は、それを人の手によって克服可能な、不治の病というよりは社会的差別、祭祀的禁忌に関わるものとする解釈により親和性がある。このキリスト教思想史上にも教会政治上にも傑出した二人の人物のレプラ解釈には、それぞれの都市と教会の置かれた歴史的・政治的な環境や神学的・思想的伝統が反映されている。後年西ヨーロッパの教会がキュリロスの神学をより強く引き継いだことは、レプラを「業病」とする聖書解釈にも影響を残したと考えられる。

Covid-19の経験が明らかにしたように、スティグマ化は恣意的に遂行される社会現象であって、はるかな古代に恣意的に作り出された概念の実体を明らかにすることは困難である(病院勤務者であることが社会的排除の理由とされるが如きことは、かつて考えられたこともないし、十分な反省もないままわずか数年で忘れられつつある)。むしろ社会学などの知見を参照しつつ、人間社会がスティグマをつくり出すメカニズムを解明することにこそ、レプラをめぐる言説史研究の焦点が置かれるべきであると考ええる。

(令和5年4月例会)